

〔投稿〕

ブハラ^ブのタジク語

井土慎二 (いど しんじ)

■奇妙な文字

ウズベキスタンは中央アジアの古都、サマルカンドやブハラなどを領内に持つ、地域の要衝だ。言語は主にウズベク語が使われている。加えて、ソ連時代の遺産であるロシア語も現在でもある程度使われている。ここでは国の主要な都市の一つであるブハラの現在の言語状況を見てみたい。

名所旧跡に事欠かないブハラは、ウズベキスタンの重要な観光資源でもある。そこで、今一人の（文字に敏感な）外国人観光客が、ブハラ市内を観光しているところを想像

しよう。街では看板や商品の表示などに特に変わったところはない。ラテン文字がある。新しいアルファベットに基づくウズベク語だ。キリル文字もある。ウズベク語の旧アルファベットに基づくものかロシア語のどちらかだ。くわえてブハラ大学や市内の学校の入り口、または観光客が多いスポーツの土産物屋の店先では英語の表札や看板もみられる。

しかし、彼（女）が注意深い観察者ならば、キオスクの窓にかかった、一枚の紙からなり、紙面の三分の一をテレビ番組案内が占める薄い新聞に印刷された文字に違和感を感じるかもしれない。その文字はキリル文字ではある。し



かしウズベク語の旧アルファベットにもロシア語のアルファベットにもない文字がある。新聞の名前は「ブホロイ・シャリフ」と読める。タジク語だ。

ブハラはサマルカンドと並んでウズベキスタン領内のタジク語話者の中心地の一つだ。しかし、タジク語のみが話されているわけではもちろんない。ブハラのタジク語話者のおそらくは全てがその運用能力に差こそあれウズベク語



ウズベキスタン周辺

をも使用する。⁽¹⁾市を取り巻く団地群にはソ連の他地域から来た家庭が多く、そこではロシア語の使用がかなり日常的だが、これに対して、旧市街、さらに市外の多くの村ではタジク語ブハラ方言が日常会話の言葉だ。

ウズベク語とタジク語のバイリンガリズムには数世紀にわたる歴史がある (Mirzaev 1969: 25)。ブハラ市から四〇キロほどの村の出身であり、タジク文語の創設において指導的な立場にいたサドリッディン・アイニー (一八七六—一九五) がタジク語とともにウズベク語でも著作活動を行った事実は象徴的だ。

しかし、書き言葉といえ、現在のブハラではほぼウズベク語かロシア語に限られる。タジク語はどうか。上述の週刊新聞『ブホロイ・シャリフ』(高貴なブハラ) のような書き言葉としてのタジク語、タジク文語の存在はブハラではむしろ例外的であり、これとても、紙面にはロシア語、ウズベク語の記事も多い。ブハラのタジク語話者の多くは、そもそもタジク文語がほとんどない環境で育つ。

■ ブハラ の タジク 語

さて、それでは彼らのタジク語はどのようなものか。ブハラ方言はタジキスタンのタジク文語とはだいぶ異なる。論より証拠、一つわかりやすい例を挙げよう。まず左のブハラ方言話者による一文を見ていただきたい。「十年コースを終了した生徒達」をブハラ方言で表わしたものだ。

da-sol-a kurs-a tamom ka(r)da-gi⁽³⁾ student-o
十年 adj コースを 終了した 生徒達

右の例をタジク語の文法書 (Rastorgueva 1954: 560) に載っている例文に少し改変を加えた左の例と比べていただきたい。左の例ではイザーフェットが使われ、その点ではペルシャ語らしいづくりだ (イザーフェットは簡単に言って、修飾される要素の後に現れて修飾する要素と結びつける形態素)。

talaba-gon-i kurs-i dah-sol-a-ro tamom kard-a-gi⁽⁴⁾
生徒達 iz コース iz 十年 adj を 終了した

ご覧のように大分様子が違う。名詞の借りいれ元の違い (student はロシア語、talaba はアラビア語より) はさて

おき、修飾される名詞の位置が「生徒」にせよ「コース」にせよ全く異なる。ブハラ方言の例では形容詞句が名詞に先行していることが見て取れる。これはイザーフェットを使つた文法書の例とは逆の順序だ。⁽⁶⁾ この文法書に見られるような、形容詞句が名詞に後続する形が規範とされ、教科書等ではこの形が教えられる。

では、ブハラ方言の語順は何に由来するか。この文をウズベク語に訳し、ブハラ方言の例と並列させてみよう。

da-sol-a kurs-a tamom ka(r)da-gi student-o⁽⁸⁾
o'n yil-lik kurs-ni tugat-gan o'quvchi-lar⁽⁹⁾
十年 adj コースを 終了した 生徒達

出来すぎのようだが、ブハラ方言のものと形態素レベルで一対一の対応をなしていることがみてとれる。

このように、ブハラ方言にはウズベク語の影響が強く、一方では、規範とされるタジク文語に接する機会が少ないことに起因すると思われる特徴や最近の独自の発達の結果と思われる特徴もある。このような特徴には、たとえば二十代の若者に観察される -a sudan による受動態の不在などが例になろうかと思われるが、ここでは詳述の煩を避け

よう。要するに、ブハラ方言はタジク文語が示す規範からの一見して明らかな逸脱を示す。

■現代タジク文語の源流

ではブハラ方言話者は、このような自分たちの言葉をどう評価しているか。肯定的な評価はあまり聞かれない。曰く「正しくない」、「ウズベク語やロシア語の影響を受けていて不純」。一方で、彼らがタジク文語と考えているものにはたいいてい「正しい」、「純粹」といった肯定的な属性が与えられている。このように、ブハラでは、ブハラ方言は「正しくない」という受け止め方をするブハラ方言話者が多い。

これはある意味で驚くべきことだといっている。なぜならブハラ方言話者が「正しい」と考えるタジク文語は、実はブハラ・サマルカンド方言をその土台としているからだ⁽¹⁰⁾。これにはタジク文語の創造に指導的な役割を果たした前述のアイニーがブハラとサマルカンドの間の（ブハラに近い）ギジドゥヴォン地区の出身で、つまりはブハラ・サマルカンド方言話者であることの影響がある。

Melex (1966: 22; Ėsmirzov (1977: 20) の引用) は「ギジドゥヴォン方言とタジク文語の比較は、それらが音声の面でも、形態と語彙の面でも、大きな一致を持つことを示す」とし、「現代タジク文語の基礎にブハラ・サマルカンド方言が存在する」ことを明らかにした。Comrie (1981: 164) はこれをさらにはつきりと述べている。「標準タジク文語は本質的にサマルカンド・ブハラ方言を基礎にしている」。

ここで「本質的に」というところに少し注意書きをつけよう。タジク文語の成立過程においてはペルシャ語との差別化を図り、さらに大衆に解される言語を旨指すとともに (A'lo-zoda 1930: 4, Jahangiri 1997: 23-28)、過去の文化的・文学的遺産におけるペルシャ・タジク語からの大きな乖離を避けるといった様々な考慮が働いたという (Soper 1996: 56)。口語に存在しない統語的特徴も加えられた (同上)。つまり当時のブハラ・サマルカンド方言がそのままタジク文語となったわけではない。

しかしながら、既述のように、タジク文語の基礎は（タジク文語制定当時においてもウズベク語の影響は顕著であ

った) プハラ・サマルカンド方言に置かれている。これは何を意味するか。現代タジク文語の成立過程を見る時、プハラ方言はその「正しさ」をもっとも否定され難い位置にあるということだ。

このエッセイの冒頭に登場した観光客は「ブホロイ・シヤリフ」が何語で書かれているかを知る事はないかもしれない。しかしプハラに住人はそれがタジク文語である事を知っている。彼らの中には、その「正しい」タジク文語が七十余年の昔に自分の祖父母が使っていた言葉をその基礎としていることを知っているものもある。それでもなお、多くのプハラ方言話者、殊に若い話者の主観において、プハラ方言は「正しくない」。

言葉は何をもって「正しい」言葉とされるか。その「正しさ」は少なくとも客観的基準では計られないようだ。

【注】

(1) しかしタジク語を母語とする者のウズベク語プハラ方言と、ウズベク語を母語とする者のその間には二つを隔てる多くの特徴がある (詳細は Mirzaev 1969: 19-25 を参照)。

(2) 文語では *to*。方言における用法は Ghaforov (1980) に詳しい。

(3) この例はやや口語に近い。

(4) ここではイザーフェットはチュルク言語学における用法では使わない。

(5) プハラ方言でももちろんイザーフェットは使われるが、引用した例では明らかにイザーフェットを使わないほうがより抵抗が少なく。

(6) しかし Zehni (1987: 154) にはこうある: 「タジクとダーリー語文法によると、形容詞は普通は名詞の後に来るが、時々、名詞の前にも来る」。

(7) 例え *Arzumano* v *Sanginov* (1988: 211-6) 'Nizmu-hammadov' 他 (1955: 94-5)。

(8) 「コース」で学生徒には借用語の *talaba* の使用がより一般的かもしれない。

(9) 名詞に先行する *o* 形容詞句がタジク語の出版物に皆無というわけではなら。Rustamov と Ghaforov (1986: 258) は、口語に特徴的という注釈付きで、いくつかの例を挙げている。

(10) *A'la zoda* (1930: 5) も参照。

【参考文献】

- A'la zoda*, F. (1930) "Boz ham dar atrofi mas'alai alifboi navi tojik." *Rahbari donis* vol. 30: 5-7.
A'lo-zoda, F. (1930) "Dar girdi zaboni adabii tojik." *Rahbari donis* vol. 28: 3-4.
Arzumano, S. / *Sanginov*, A. (1988) *Zaboni tojik*. Dušanbe: «Maorif».
Buxoro sanji, Buxoro: Markazi madanii "Oftobi sughdien"-i

- Buxoro.
Comrie, Bernard. (1981) *The Languages of the Soviet Union*. Cambridge University Press.
- Əsničəv, M. (1977) *Dialektologiyai tojik (dasturi ta'imn) : Qisimi yakum*. Dušanbe: Universiteti Davlatii Tojikiston ba Nomi V. I. Lenin.
- Ghaftorov, R. (1980) "Ifodai xabar bo šaklhoi sifati fe"i dar sevahoi zaboni tojik." IN *Zabonšinosii tojik*. Dušanbe: (Doniś), 203-216.
- Jahangiri, Guissou. (1997) "The Premises for the Construction of a Tajik National Identity, 1920-1930." IN Djaili, Mohammad-Reza/Grare, Frédéric/Akner, Shirin eds. (1997) *Tajikistan: The Trials of Independence*. New York: St. Martin's Press. 14-41.
- Melex, N. A. (1968) *Gizduvanskij govor tadžikskogo jazyka* (Avtoref. kand. diss.). Leningrad.
- Mirzaev, M. M. (1969) *O'zbek tilining Buxoro guruhpa shevlari*. Toshkent: O'zbekiston SSR (Fan) Nashriyoti.
- Niežnuhammadov, B. / Niežn, Š. / Buzurgzoda, L. (1955) *Grammatikai zaboni tojikī Qisimi I: Fonetika va morfologiya baroi maktabhoi hufsoila va miēna*. Stalinobod: Našriēti Davlatii Tojikistona.
- Rastorgueva, V. S. (1954) "Kratkij očerk grammatiki tadžikskogo jazyka." IN Rahimi, M. V. / Uspenskaja L. V. eds. *Tadžiks ko-russkij slovar'*. Moskva: Gos. Izd. Inostrannyx i nacional'nyx slovarnej. 529-570.
- Rustamov, Šarofiddin/Ghaftorov, Razzoq eds. (1986) *Grammatikai zaboni adabii hozirai tojik jilii II: Ibova va sintaksisi jumlahoi sodda*. Dušanbe: Našriēti (Doniś).
- Soper, John. (1996) *Loan Syntax in Turkish and Iranian*. Revised and edited by Andras J. E. Bodroglegeti. Bloomington: Eurlingua.
- Zehnī, T. (1987) *Az ta'rixi leksikai zaboni tojikī*. Dušanbe: Našriēti (Doniś).

(シネニー大学／言語学)